



職業としての通訳⁽¹⁾

関川富士子
ベルリン日独センター語学研修部長
aiic⁽²⁾ 会議通訳者

本日は、皆様方のゼミの先生より、「異文化間コミュニケーションの観点からみる通訳業」というテーマでお話するように承っておりましたが、先生のお話しでは、皆さんの関心事は「職業としての通訳」にあるということでしたので、最初に「職業像」を簡単にまとめ、その歴史の変遷に触れ、時間があれば異文化間コミュニケーションの具体例を挙げたいと思います。

1. 職業像 (Berufsbild)
2. 歴史の変遷 (historische Entwicklung)
3. 異文化間コミュニケーション (interkulturelle Kommunikation)
——具体例 (persönliche Erfahrung)

1. 職業像

世の中には「二つ以上の言語ができる人なら誰でも通訳者になれる」と考える人が大勢います。

Jeder, der eine Woche in Rimini am Strand gelegen hat, kann sich Dolmetscher nennen.
Bernd ZETTEL (Mitglied aiic, Regionalsekretär Deutschland bis März 2000), Frankfurter Allgemeine Zeitung, 19.01.1999

実際、「通訳者・Dolmetscher・*interpreter*」という名称は、法的に規定されている名称ではありません。つまり、ドイツの「職業教育訓練指定職 (Ausbildungsberuf)」ではないのです。

では、つぎの一覧をみてください。

1. ベルリン自由大学のゼミ (Seminar: Japanische Kommunikation — Charakteristika in den verbal- nonverbalen Äußerungen, interpersonalen Bezügen, Diskursen, 30.05.2001) で日本語を学ぶ学生を対象に講演を依頼された際に作成した下書き原稿。講演言語は日本語。四角内は当日用いたOHP。
2. Association Internationale des Interprètes de Conférence: www.aiic.net

第1グループ

- Empfangs- und Messehostess (コンパニオン)
- Hotelfachmann/-frau (クラーク、レセプションист)
- Moderator (Rundfunk, Veranstaltungen, usw.) (司会者、議事進行者)

第2グループ

- Fremdsprachenreiseführer, -reisebegleiter (通訳ガイド)
- Fremdsprachensekretär (外国語に堪能な秘書)
- Fremdsprachenkorrespondent / Auslandskorrespondent (海外特派員)

第3グループ

- Fremdsprachenlehrer (語学講師)
- Fremdsprachenwissenschaftler, -sprachforscher, -linguist (言語研究者)

第4グループ

- Übersetzer (翻訳者)
- Dolmetscher (通訳者)

さて、この分類の基準はなんでしょう。

第1グループ: **外国語ができると便利な職業** (Berufe, bei denen ein Fremdsprachenkenntnis vorteilhaft sind.)

- Empfangs- und Messehostess (コンパニオン)
- Hotelfachmann/-frau (クラーク、レセプションист)
- Moderator (Rundfunk, Veranstaltungen, usw.) (司会者、議事進行者)

第2グループ: **外国語を用いる職業** (Berufe, bei denen man in einer oder mehreren Fremdsprache/n arbeitet.)

- Fremdsprachenreiseführer, -reisebegleiter (通訳ガイド)
- Fremdsprachensekretär (外国語に堪能な秘書)
- Fremdsprachenkorrespondent / Auslandskorrespondent (海外特派員)

第3グループ: **外国語を取り扱う職業** (Berufe, die Fremdsprache als Gegenstand haben.)

- Fremdsprachenlehrer (語学講師)
- Fremdsprachenwissenschaftler, -sprachforscher, -linguist (言語研究者)

第4グループ: **二つの言葉を仲介する職業** (Sprachvermittlung)

- Übersetzer (翻訳者)
- Dolmetscher (通訳者)

つまり、どの職業も「外国語」を素材として取り扱っているわけですが、その扱いかたが違うのです。たとえば草花を例に考えてみましょう。花を栽培する人もいれば、買い上げて卸しを営む人もいますし、卸しから買って小売りを営む人もいます。生け花の先生もいれば、ホテルなどで生け花を飾り、フラワーアレンジメントで生計をたてている人もいます。盆栽を育てる人、植木屋さん、造園家、景観デザイナー、グリーンエリアプランナーという職業もありますし、植物学者や、盛花だけを描く画家なども草花を扱っているのです。同じことが「外国語」についてもいえるのです。コン

パニオンも、通訳ガイドも、語学講師も、通訳者も「外国語」を使って働いていますが、その素材である「外国語」の調理の仕方が異なるのです。

もちろん、お花の小売りをする傍らフラワーアレンジメントの教室を主宰している人もいるように、語学講師をしながら通訳もする、という人もいます。でも、大概は特化しています。

改めていう必要もないかと思いますが、「通訳者」と「翻訳者・Übersetzer・*translator*」は別物です。ドイツ連邦外務省のランゲージサービス(Sprachendienst)がつぎの部署に分かれているところにも、この差異が如実に表れているといえるでしょう。

FB 1: Dolmetschdienst
FB 2: Übersetzungsdienst
FB 3: Informationstechnik (IT), Terminologie und Dokumentation
FB 4: Sprachfortbildung
FB 5: Völkerrechtliche Verträge

皆さんは、通訳者と翻訳者の違いをご存じとの前提の上で話しを進めて参ります。

では、つぎに通訳そのものを分類してみましょう。

nach Richtung/en

- unilaterales Dolmetschen
- bilaterales Dolmetschen

nach Art

- Konsekutivdolmetschen
- Flüsterdolmetschen
- Simultandolmetschen
- Gebärdendolmetschen

nach Qualifikation

- Diplom-Dolmetscher / Diplom-Sprachmittler
- beeidigter Dolmetscher
- staatlich anerkannter (geprüfter) Dolmetscher

nach Inhalt / nach Anlass

- Dolmetschen (通訳)
- Begleitdolmetschen (アテンド)
- Dolmetschen für *technical visit* (企業視察)
- Gerichtsdolmetschen (法定通訳)
- Gesprächs- / Verhandlungsdolmetschen (商談通訳)
- Ansprachendolmetschen (式典通訳)
- Vortragdolmetschen (講演通訳)
- Telefondolmetschen (電話通訳)
- Fernsehdolmetschen (同時放送通訳)
- Eine Sonderform des japanischen Fernsehdolmetschens (TV音声多重二ヶ国語通訳)
- Konferenzdolmetschen (会議通訳)

ここで、通訳像 (Berufsbild)に戻ります。

通訳者は芸術家 (Künstler) である。
通訳者は職人 (Handwerker) である。
通訳者はサービス業者 (Dienstleister) である。

私の大先輩のある同僚は「通訳者は芸術家である」といっています。つまり、通訳というのは言葉を置き換えることではなく、彫刻家や画家が自分のメッセージを表現するにはどうしたら良いか試行錯誤するように、通訳者も(自分のではないけれども)メッセージを表現する最良の手段を模索し、しかも瞬時に完成形態までもってゆく「創造的な職業である」というのです。

私自身は「通訳者は職人である」と考えます。下駄職人が木という素材から下駄を作り上げるように、私は言葉という素材からメッセージを練り上げるのです。「三枚刃の下駄を作ってくれ」とか「ポリエステル製の鼻緒でいいわ」といわれたら職人氣質の人は怒るでしょう。それと同じように、私も自分の職業意識や倫理観と相容れない仕事は断ります。

「通訳者はサービス業者である」、これは誤解です。通訳者のなかには、お客様の荷物をもったり、自家用車で送り迎えしたりするのも当然と思っている人もいますが、これは通訳業ではありません。また、お客様のなかにも、「どうせ通訳者もご飯を食べるのだから、その席でついでに通訳してくれても良いでしょう」と考える人もいます。しかし、「ついでの通訳」などというものはありません。

通訳者は芸術家 (Künstler) である。
通訳者は職人 (Handwerker) である。
~~通訳者はサービス業者 (Dienstleister) である。~~

芸術家でもよし、職人でもよし、でも絶対にサービス業者ではありません。

Das Schicksal der Welt hängt in erster Linie von den Staatsmännern ab und in zweiter Linie von den Dolmetschern.

Trygve LIE (Norwegischer Politiker, als erster Generalsekretär der UNO bis 1953 im Amt)⁽³⁾

2. 歴史的変遷⁽⁴⁾

「人類最古の職業」というと一般に売春のことを指します。日露通訳者の米原万里さんは、人類最古の職業は通訳業であったと書いています。売春の起源は神殿売春であり、バビロニアのミュリタ(愛と豊饒の女神)神殿にしても、前490年にアクロポリスの丘に建てられたパルテノン(乙女の部屋)神殿にしても、男が貢ぎ物を神に捧げる代償に共同体の女あるいは神殿の巫女たちがその男に返礼として春を捧げたところから「売春イコール人類最古の職業」説が生まれたそうです。そして、米原さんは「巫女さんたちは神々と人間とのコミュニケーションを取り持つことを主な生業とし

3. Trygve Halvdan LIE (1896年～1968年)、初代国連事務総長(1946年～1953年)

4. 本章はつぎの文献を参照した。

- Dr. Klaus KASTNER: „Der Dolmetscher und Übersetzer — ein historischer Streifzug durch drei Jahrtausende“. In: Bundesverband der Dolmetscher und Übersetzer e. V. (Hrsg.): „2. Deutscher Gerichtsdolmetschertag Berlin, 1997 — Ausgewählte Referate“
- ウィンター良子(著)「監修のことば」、松岡祐子(訳・編)『英日・国際会議用語辞典』、東京、静山社、1999年、9頁～11頁所収
- 米原万里『ガセネット&シモネット』、東京、文芸春秋、2000年、97頁以下

て」いたわけだから、これは通訳業である、と考えるのです。また、ギリシア語で通訳のことを「*hermeneuties*」というが、これはオリンポスの神々と人間とのあいだのコミュニケーションを仲介したヘルメス神から由来し、さらに時代を遡っても、常に霊媒やシャーマンのような彼岸との交信を取り持つ通訳者がいたはずだ、と米原さんは考えます。

ほかの文献を読んでみても、通訳の歴史は人類の歴史(前10万年)と同じくらい古い、ということになります。ちなみに翻訳の歴史は文字の誕生後(前4000年)のことになりますから、通訳の歴史よりは浅いということになります。

ヨーロッパ・アフリカに限定した場合、⁽⁵⁾今日の意味での通訳は前7世紀から3世紀に始まったといわれています。つまり、ナイル川流域、中近東、チグリス・ユーフラテス文明、ヘレニズムなどの文明が共存し、混じり合った時代に通訳者が必要になった、と考えられるからですが、これを裏打ちするのがナイル川流域で発見された石刻で、これには古代エジプト時代にすでに通訳の存在があったことを思わせる描写が見られるそうです。また、ギリシアの歴史家ヘロドトス(*Herodotos*、(独) *Herodot*)は、前7世紀に若いエジプト人がギリシア人のもとでギリシア語を学び、その子孫が商人と船乗りのあいだに位置するエリート集団を構成して通訳的な働きをした、と記述しています。

ちなみに、ドイツ語の「*Dolmetscher*」という名称は1200年頃に確立されました。これは、トルコ語の「*tilmaç = Sprachschatz, Sprecher*」「*tilmač = Mittelsmann*」から発祥したといわれています。欧州最古の翻訳学校(*Übersetzer-akademie*)は12世紀から15世紀にトレドにありました。最古の2ヶ国語辞書は1477年にベネチアで出版された『*Vocabulario Italiano-Teutonicum*』、つづいて1480年に英仏辞書がイギリスで刊行されました。

日本における通訳(通詞とか通事と呼ばれていました)に関するもっとも古い資料は江戸時代(1603年～1867年)のもので、唐通事とオランダ通詞がいたことが記録されています。最初は語学ができる役人が必要に応じて通訳の任に当たったそうですが、やがて通詞(通事)地役人の制度が確立され、1641年に職業的通詞(通事)集団が成立して世襲制をとったようです。

しかし、実際には江戸時代以前にも中国(遣隋使600年～614年、遣唐使630年～894年)や蒙古との国交があり、鎌倉時代の貿易商の謝国明⁽⁶⁾のように名前が残っていても通商、あるいは学問の傍ら通訳の任についていたものは大勢いたと考えられます。

通訳と翻訳の歴史の変遷を語ると1時間では済みませんので、最後に同時通訳の誕生についてお話します。

同時通訳をするには、当然そのための装置が必要です。最初に同時通訳のアイデアが閃いたのはボストンの実業家エドワード・フィンレ。19世紀後半にベル(*Alexander Graham Bell*)が電話の技術を開発し、この二つを応用して1926年に特許をとったのがゴードン・フィンリー、アメリカのIBM(*International Business Machine*)社の無線技師でした。

世界初の同時通訳の試みは1927年、ジュネーブで開催された国際連盟の会議です。国際連盟では公用語が英語とフランス語だけだったせいか、次回からは逐次通訳に戻しています。

つぎの試みが1928年、ソビエト連邦モスクワ、コムンテルン(共産主義インターナショナル)第6回大会です。コムンテルンは多言語機関⁽⁷⁾だったので、以後ずっと同時通訳で会議を進め、これがソ連邦における同時通訳装置の発展に

5. こう書くのは、4000年の歴史を誇る中国に関する資料を入手していないからです。

6. 「謝国明(しゃこくめい)(生没年不詳)／鎌倉時代に貿易港として繁栄した博多の貿易商兼船主。父親は南宋の寧波(にんぽ一)と博多を行き来する貿易商で、謝国明の代から日本に帰化しました。中国・日本・蒙古・ベトナム・インド方面へと広範囲に交易を行い、当時の国際状況を的確に把握していた、まさに13世紀を代表する国際人でした。／鎌倉・京都にも交易の拠点を持ち、北条時頼・時宗父子とも深い親交を結びました。蒙古に抵抗する南宋・高麗の状況を含めて、時宗に国際情勢を伝え、時宗の外交政策を方向つけていくことになります」(『ジパング倶楽部』第17巻4号、通巻188号、2001年3月25日発行、17頁)

7. 旧ソ連邦諸国で現在用いられている言語(*Harenberg „Aktuell 2001“, Dortmund, Harnberg Lexikonverlag, 2000* を参照)

- Armenien: Armenisch, Russisch, Kurdisch
- Aserbajdschan: Aseri-Türkisch, Russisch
- Estland: Estnisch, Russisch
- Georgien: Georgisch, Russisch, Armenisch
- Kasachstan: Kasachisch, Russisch
- Kirgistan: Kirgisch, Russisch
- Lettland: Lettland, Russisch

つながりました。1933年のコミンテルン第8回執行委員会総会ではブースが設置されるようになり、1935年にレニングラードで開催された国際生理学会では(条件反射で有名な)パヴロフ(Ivan Petrovich PAVLOV)の冒頭スピーチがフランス語、英語、ドイツ語、イタリア語に同通されたそうです。

1936年になるとベルギーの議会に同時通訳が導入されましたが、ベルギーでは公用語がオランダ語、フランス語、ドイツ語なため、必要な措置だったのでしょう。

「同時通訳は1945年11月に始まったニュルンベルク裁判でスタートした」とする文献も数多くありますが、同時通訳はニュルンベルクで「スタートした」のではなく、「国際舞台で華々しくデビューし」、その活躍の場は東京裁判へとつづき、今では国連や欧州連合(EU)においてなくてはならない職業として確立されています。

Das Schicksal der Welt hängt in erster Linie von den Staatsmännern ab und in zweiter Linie von den Dolmetschern.

Trygve LIE (Norwegischer Politiker, als erster Generalsekretär der UNO bis 1953 im Amt)

3. 異文化間コミュニケーション——具体例

皆様のゼミ必読書『異文化間コミュニケーションと通訳者の役割(同時通訳の技法分析と実際)』に以下の文章がありました。

通訳者は言葉の意味を扱うのが仕事だが、言葉の意味には、1. 辞書的意味(*lexical meaning*)、2. 文法的意味(*grammatical meaning*)、3. 社会的文化的意味(*social and cultural meaning*)の3種類がある。(…)通訳者は主に1と2の意味を扱うのだが、言葉の持つ社会的文化的意味に関しては特に心してかからなければならない。

谷本秀康、『異文化間コミュニケーションと通訳者の役割(同時通訳の技法分析と実際)』、東京、英潮社、1989年、17頁

これを読んだとき、驚いてしまいました。(著者が「辞書的意味」で挙げた例はさておいて)通訳者が扱うのは1でも2でもなく、3です。ここでは学術的説明は割愛し、具体例だけ挙げます。

外来語

最初に、辞書的意味でとくに注意を要する例として、外来語を挙げます。ドイツ語にも数多くの外来語がありますが、原語における意味とドイツ語になってからの意味が異なる場合がありますね。日本語でも、同じような例が多々あります。

ある会議で、ドイツ人が「Ich spiele meinen Trumpf aus.」といわれたので、「切り札を切ります」と訳したら、一緒にブースに入っていた同僚が「トランプ!」とメモを寄こしてくれました。でも、実は私の訳が正しいのです。外来語のなかには、原語の意味と違った意味をもつ言葉も少なくないのです。「トランプ」の例ですが、明治の初め、外国人がテー

-
- Litauen: Litauisch, Polnisch, Russisch
 - Russland: Russisch, Nationalsprachen
 - Tadschikistan: Tadschikisch, Russisch, Usbekisch
 - Turkmenistan: Turkmenisch
 - Ukraine: Ukrainisch, Russisch
 - Usbekistan: Usbekisch, Russisch
 - Weißrussland: Weißrussisch, Russisch

ブルを囲んでトランプゲーム(ドイツでいうところの Skat)に興じていました。側にいたある日本人が、一人の外国人が手にするカードを指差し、「これは、何ですか」と聞きました。聞かれた人は正にそのカードを切り札として切ろうとしていたところだったので、「Das ist mein Trumpf.」と応えました。つまり、「これは私の切り札です」と応えたのです。でも、ゲームのルールを知らない日本人は、単にその道具の名称を知りたかっただけだったので。以来、日本では「トランプ」は「切り札」ではなく、カードゲームを指すようになったそうです。

ドイツ語「Kartenspiel」	=	日本語「トランプ」
ドイツ語「Trumpf」	=	日本語「切り札」
日本語「トランプ」	≠	ドイツ語「Trumpf」

自分では分かったつもりでいても、「もう一度辞書をあたる」のは、必要不可欠なことです。

Duzen と Siezen

つぎに、「社会的文化的意味」の例をいくつか挙げましょう。

日独学生大会が同時通訳付きで開催されたことがあります。私自身は通訳者としてではなく、オブザーバーとして参加したのですが、なんとなく話しが噛み合わない印象を受けました。しばらくして気付いたのが、ドイツ人学生の発言「Ich möchte gerne wissen, wie ihr dazu steht.」「Könnt ihr denn aus euren Erfahrungen berichten?」を通訳者を介して聞くと「皆様方のご意見を伺いたと思います」「皆様方の体験をお聞かせいただければと思います」、日本人学生の発言「ドイツを参考に頑張りたいと思います」は「Wir möchten aus Ihren Erfahrungen lernen.」、つまり、ニュアンスがずれてしまっているのです。会議通訳者は若くても30歳、35歳、ベテランともなると70歳現役だったりしますから、「duzen」に縁がない人もいます。また、大人になってからドイツ語を修得した日本人通訳者のなかには「duzen」を避ける傾向の人もいます。しかし、学生の意欲、熱意、初々しさを伝えるためにも、この場合は「siezen」は避けるべきであったと思います。

別の例ですが、以前、コール首相と中曽根総理の懇談を通訳をしたことがあります。最初にコール首相が凄い勢いでお話しされ、それを日本語に逐次で訳出しました。つぎに中曽根総理が「先生がご健勝なことを伺い、嬉しく思います」という主旨のことをいわれたので、私は「Es freut mich zu hören, dass es Ihnen gut geht.」と訳しました。とたんにコール首相があの大きな体全体をグイッと前に突きだされ、「Wir duzen uns!」といわれたのです。推測するに、過去のある時点で「ファーストネームで呼び合おう」「Lass uns duzen.」というやりとりがあったのでしょう。ドイツの「Lass uns duzen.」は米国の「ファーストネームで呼んでくれ」「Call me Ron!」と思われがちですが、米国の「ファーストネームで呼び合おう」はあくまでも「siezen + ファーストネーム」です。米国では、ファーストネームで呼び合っても必ずしも「お友達」ではいのです。しかし、文化・慣習を忘れて言葉だけを訳すと「ファーストネームで呼び合おう」「Lass uns duzen.」になってしまうのです。コール首相と中曽根総理は過去におそらく「Call me Helmut.」「Call me Ron.」ということがあり、それが「Lass uns duzen.」と訳されてしまったのでしょう。そういう過去の経緯を事前に知らされていなかった私はドイツ連邦外務省のランゲージサービスにたいし内心で一瞬悪態をつきました。しかし、たとえ知らされていたとしても、コール首相の言葉を「君と会えて嬉しいよ」と訳しては、中曽根総理にたいして失礼にあたります。というのも、中曽根総理の日本語はどう解釈しても「duzen」ではなく、品のある日本語で、(通訳者としては失格との叱責を受けても)コール首相を「duzen」するほど私自身の自意識を殺すことも難しく、残りの時間はいかに「Du」も「Sie」も避けて訳出するかに心を砕いた次第です。

これは「辞書的意味」を訳しているだけではいかに不十分であることを示す例でしょう。

議事進行

日本とドイツでは、祝宴の進行の仕方が異なります。

日本では司会者がいて、「最初に〇〇大学の××先生にお祝いの言葉をいただきます。××先生、お願いいたします」、スピーチの後は「××先生ありがとうございました。では、つぎに△△研究所所長の□□様のご挨拶をお願いします。□□様どうぞ」となります。スピーチをするほうは、「ただいまご紹介にあずかりました〇〇大学の××です。本日はこのような晴れがましい席でお話する機会をいただきまして、まことに光栄に存じます」と始めます。場合によっては、司会者が司会を始める前に議事次第を説明する人がいて、司会者を紹介します。

ドイツでは何の前触れもなく話者が壇上に上がり、自己紹介抜きでスピーチを始めます。聴衆は話者の顔を知っているか、プログラム片手にチェックするか、あるいは訳も分からず拝聴するか、ということになります。

さて、ドイツの祝宴で頻繁に体験することは、日本人スピーカーが用意してきた原稿どおりに「ただいまご紹介にあずかりました〇〇大学の××です」と始めてしまうことです。こういう場合、通訳者はどう対応するのでしょうか。

「辞書的意味」と「文法的意味」を訳せば、つぎのようになってしまいます。「Ich bin der XX von der Universität YY, der gerade vorgestellt worden ist.」しかし、本当に、このような訳でよいのでしょうか。

ここに、言葉のもつ「辞書的意味」とか「社会的文化的意味」を越えた「異文化間コミュニケーションにおける通訳者の役割」があるのではないのでしょうか。私でしたら「Herzlichen Dank für die Gelegenheit, dass ich als Vertreter der Universität YY, zu Ihnen sprechen darf.」とするでしょう。

婉曲表現 (Euphemismus)

ある会議で、日本人議長が「この案件は持ち越したい」とおっしゃり、同時通訳をしていた私は「vertagen」と訳出しました。会議終了後に「持ち越しということは、次回会合で再び取り上げるということですか」とお伺いしたところ、「持ち越しといったのは、相手の顔を潰さないため、私は却下したつもりです」といわれるのです。議長の考えは、私の訳を聞いていたドイツ人聴衆に伝わったのでしょうか…。おそらく、伝わらなかったのではないのでしょうか。それは、私が「辞書的意味」を訳したものの、議長自身の「社会的文化的意味」を捉えきれていなかったからです。しかし、同時通訳の場では議長の本音を尋ねることもできず、ああいうふうには訳すしかなかったのではないかと思います。

以上、思いついた例をいくつか挙げましたが、これらの例で、通訳者が訳出するのは「社会的文化的意味」であり、そうすることによって「異文化間コミュニケーション」がスムーズに進むよう貢献していることの説明になりましたでしょうか。

4. 模範演技

皆様方のゼミの先生から「模範演技をみせて欲しい」とのご要望をいただきましたが、残念ながらできません。スポーツ選手が競技日程にあわせてコンディションを調整してゆくように、私も本番に向けて精神を集中していくタイプの通訳者です。したがって、精神統一なしの通訳では、それなりのパフォーマンスしかできません。下手な例をおみせして皆様の意欲を削ぐのは避けたいと思います。

かわりに、過去の同時通訳業務のビデオがありましたので、それを観て(聞いて)いただくことで本日のお話の締めとしたいと思います。